■乳・幼児期に聴いた曲は人格に影響を及ぼす

この話を井深氏に話されると、「面白い。それはきっと愛育病院にゐる間、毎日聴いた曲に違ひない。調べてみる必要がある」と言って森氏を促がされました。調べてみると果してその通りだったのです。

生後１年内外の体験といふものは、大脳がこれを受入れはするが記憶として取出す事は出来ません。それは完全に消化して人格の一部になってしまふからでせう。だから、お嬢さんが毎日聴いた曲は、大脳の奥深く刻まれて、人格の一部になってゐて、その曲に対しては特別の反応をするのだと思ひます。

だから、乳・幼児期には世界的な名曲を、それも立派な機器を通して聴かせる事が肝要なのです。安物の機器で音程の悪い音楽を聴いてゐれば音痴になるでせうし、下品な音楽ばかり聴いてゐれば下品な音楽にしか反応しない人間になるに決ってゐます。それが本人の意志でさうなるのならそれも良いでせうが、さうでは無いのだから困るのです。

私は戦争中空軍将校でしたので、普通の将校の２倍近い給料を貰ってゐましたが、その大部分を音楽レコードの購入に当て、主にヨーロッパの古典音楽を集めました。ベートーヴェンの交響曲もこの時全部集めました。明日をも知れない毎日でしたから、今生の想ひ出に世界の名曲といふ名曲を存分に聴いてみたかったからでした。それで毎日夕食後、下宿で独り静かにこれを聴いたのです。

然し、それから４５年経った今は、それらの曲よりも、琴や三味線や昔の流行歌を聴く方が心が和みます。私は若い頃、流行歌を軽蔑して歌ひもせず聴きもしませんでした。にも拘らず、不思議と東海林太郎や藤山一郎の歌が頭の中に貯へられてゐて、テレビでこれを聴くと、憶えてゐない筈の歌詞が自然と口を衝いて出て来るのです。青年時代に世界の名曲に憧れて随分聴いたものですが、それは脳の表面に刻まれただけで、幼年時代に脳の深層に刻まれた音楽に心は強く反応し惹かれるもののやうです。